

病院だより89



美祿市病院事業管理者
高橋睦夫

新年のごあいさつ

新年明けましておめでとうございます。

昨年は、7月の西日本を襲った豪雨、7・8月の酷暑、更には9月の台風21号や北海道胆振（いぶり）東部地震など自然災害が多い年でした。よいニュースでは、6月にシンガポールで開催されたトランプアメリカ大統領と朝鮮民主主義人民共和国（北朝鮮）の金正恩最高指導者との初めての米朝首脳会談（本稿を書いている11月末では、その後の進展はありませんが）、10月の本庶 佑氏のノーベル生理学・医学賞の受賞、11月にはiPS細胞由来の神経細胞をパーキンソン病患者さんの脳に移植した事例がありました。これは2014年と2017年に、眼の網膜疾患である「加齢黄斑変性」の患者さんにiPS細胞から分化・誘導した網膜細胞（神経細胞）を移植した事例に続いての出来事です。このように、今後はiPS細胞やES細胞を使った再生医療が最先端治療法の1つとなるはずですが、また、ICT（情報通信技術）やAI（人工知能）などの進歩・発展により、医療の現場においても、診断・治療面での革新が起こってくることを期待されています。

本年の美祿市におけるニュースとしては、市の少子化対策の一つとして、4月から、美祿市立病院の職員駐車場の一角に、「病児保育施設」が開設されます。この施設は、子供さんが風邪などの病気にかかったが、親御さんに勤めがあって付き添いが出来ないような場合に、一時的にあずかってもらえる施設です。詳細な情報は、市の広報などでお知らせがあると思います。これにより、子育て中の人にとっては、勤めを休まなくてすむようになります。

さて、昨年も本欄に少し書きましたが、「地域包括ケアシステム」すなわち「高齢者の方が住み慣れた地域で自分らしい生活を全うできるよう、医療・介護・予防・住まい・生活支援が一体的に提供される仕組み」を整備する必要があります。中でも基本となるのが地域で生活を継続するための「住まい」です。たとえ具合が悪くなくても自宅での生活ができるのであれば、それが一番いいことであると思います。しかし、心身の状態や家族環境など高齢者の状況はそれぞれに異なります。高齢者の個々のニーズに応じて、自宅はもちろん様々な施設を「住まい」の選択肢と考えていかざるを得ません。自宅からときどき施設へ、施設から自宅へ、そして必要ならば病院に一時入院して施設や自宅へ戻るといった、「住まい」についての柔らかな考え方が必要となっています。そして、その「住まい」で自分らしく暮らし、必要な医療と介護を受けられ、病気が回復し重症とならない、要介護にならない、重度化しない環境づくりこそが「地域包括ケアシステム」の大きな柱であると思います。ぜひ、多くの市民の皆さんに関心をもっていただきたいと思います。

また、本年8月に、「やまぐち地域医療セミナー2019 in美祿」を開催する予定です。このセミナーの目的は、「地域のスタッフや地域住民とのコミュニケーションをはかり、地域の生活や医療の現状を直接肌で感じ、将来の地域医療のあり方について考える」ことです。自治医科大学と山口大学医学部の学生に加えて、山口大学や県立大学の看護学科の学生の参加が予定されていて、訪問介護や訪問診療など、地域における医療・介護の実体を重点的に体験してもらいます。このセミナーにより、一人でも多くの医学生や看護学生が美祿市に興味を持ち、美祿市の医療を支えてくれるようになればと願っています。

以上、年頭にあたり、皆様方のご協力をお願いするとともに、本年も宜しくお願い申し上げます。